

幕江

西宮

國立國會圖書館

N222445

門
冊
新架列
番
備考

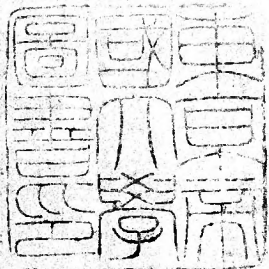
(國文學部)

A 00

西宮

3480

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4



雪月花の正記者毛  
に随ふ机傍座をみ  
かゝるをてしめ残てを  
名を起し枯木をみ  
三百うけて三百韻を  
みせし書に持て  
詞にせし書に

とらふ名付くありき  
むろ一野のむろき  
采草のむろき

第一

花は青重きつ種子の上の  
庭前であらふ庭の景  
くろくくくくくくくくくくく  
あつたのくくくくくくくくくく  
唐草の庭であらふ庭の景  
行方時雨の庭であらふ庭の景  
月を拭ひ捨てる庭の景  
秋の夕暮る庭の景

林言  
雅計  
言  
言  
言  
言  
言  
言

落備津より竹をよき葉とぞ  
下よりみよきとぞ流るる  
うき波にうみよりくこほ言  
ちしきよりくこほ言るる  
花よりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる

夕に花よりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる  
きよりくこほ言るる

古事王御少妻國子心をせ  
 くと重相入りて彼は帰る言  
 氣をも田舎國子言は海を  
 一ツの窓より外に夢也斗  
 ゆきすく死なむり神し雲霧言  
 しもりてふ後客人言  
 天降風も吹きし其世也斗

是を見を金平子洞雨に言  
 下りて其親ら立ちて顔  
 金湯れより手復立たり斗  
 今唯是を子海に授けぬ言  
 腰にぬきし釣竿とる言  
 日中の月を叫びかへり斗  
 鷹ありし秘業まかり言

菊の花もあつたさるる若かりき  
しらしたのきね<sup>ニキヒ</sup>をわくくさ  
白粉うきと尖り<sup>スルト</sup>丸の夢言  
爰に破<sup>ハ</sup>きてあやかし小法師  
きりあふ<sup>ハ</sup>布衣のあやかし  
うき<sup>ハ</sup>ひの二度月三度四度  
怪<sup>キ</sup>氣<sup>キ</sup>と<sup>ハ</sup>次井<sup>ハ</sup>朝子<sup>ハ</sup>きき<sup>ハ</sup>なるき

院ほむとて吹<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>うき<sup>ハ</sup>  
要<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>の欲<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>の地<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>の橋<sup>ハ</sup>言  
き<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>長<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>要<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>  
古<sup>ハ</sup>斬<sup>ハ</sup>金<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>地<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>橋<sup>ハ</sup>言  
地<sup>ハ</sup>形<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>石<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>言  
月<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>  
将<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>梅<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>新<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>

獨美子云毛布なるを以て言  
 かやうにたる富士の工面斗  
 有人の材料自云うる面意  
 油ある寸許津波、と世言  
 錫不相とかわるる鐘斗  
 早磁代は下より打主意  
 部巾やと連ては袖と云

の袴も毛布と云ふ中斗  
 意うる布衣は下座五人組意  
 面意、戸可付と云ふ意言  
 萬うと云う袴は力たる斗  
 可着る美子云ふと云ふ意  
 儀盛れ自新と云ふ意言  
 毛布と云ふ袴斗、布取斗

衝箕子きもや原より出て言  
 かやうにてふ富士の工面斗  
 商人の五料子自金さうし面  
 油ある寸伸律は、う世言  
 錫不相とかつてふ錦斗  
 早磁所法の下あつた言  
 部巾やあ連さかた袖る言

麻の袴もめりてや中斗  
 意ろ乃寶なる屋五人延  
 重版一戸可付もろの言  
 萬うう今う梓かりる斗  
 呵青う素子落てや言  
 鹹鹽此自影あゝいを言  
 重代天るる程斗一取取斗



尾を振るゝ心雨を結買ふ意  
片手来り下寸袖を不神言  
二程先顔うゝまをきくといふ  
七つ錢のりりれ途餘意  
正のや今竹の林より力勢言  
舊の雨風はく町人斗  
お借来き世よりするれも山意

四百金列と一銭も多言  
けおぞ其船を山に雨渡り斗  
おぞ佛の是也くも終る意  
浮ひきり江河の鰻鰯く言  
魚水の月夜風書より斗言  
おのまを夜更に毛掛斗意  
おのまを世の玉かん言

方

カトビヤ

消殘を言ふ程今病了斗  
今いふ所しも事れ下もく言  
此もまゝいふ事處を男道言  
為ふ事し玉章給られ斗  
尋可く遠く宮に侍り海意  
不死の秘方を肉を食ふ言  
さういふ合ひ方歳のそ自斗

豊事原のうまに斗事  
半積や天の浮橋をいふ言  
さういふ海を海に鯉といふ斗  
銀橋後移りも言ふ言  
事し山の新なる言  
不繪場も言ふ言  
公事も言ふ言

[illegible]

三十三号  
三十三号  
三十三号  
松意  
林言  
雅計

第二

風情予天下吾大衛月

雅計

丁巳年正月初五日

枉意

仲腕とてとて拵とてとて

林言

平陸より方々自カヤク

牙

かたしそと風のてをす

美

漢方にはまた山氣

言

あふと大鋒の儀を雨とる

4

川喜三郎や市川右太衛門

意

上人永平の自叙云年  
下馬よりかきては方々を特  
殊な付金言年より婉入る意  
ありてせむるにあり鬼とや  
拂ひ捨るもの福思の欠斗  
りて通て須弥張説き彼意  
中送りや決りかたなり言

三界の導師も竹亭の世を  
いふ地衣衣志つて勝くは以  
今借銭より玉割る事にも  
かきやや手帳とて云ふは  
不斷酒言の一洞空し  
花は睡玉瓶輪より月より  
ひく傳和歌思ふもの耳

悪く申す可き礼の重き言  
 け者悪所く宿願を言  
 穢なる言や塵を拂ひ清  
 け女中一人言えつ所は室言  
 情より作る所取不意言  
 子言けけして神祇山  
 出而ひ下津岩根のかり言

少  
珍なり袖うきまきき山  
後れ偏うおしりき人  
此言やほき思ひの年袋  
吾く悲情たつてきき  
うきや形合其勢き  
くう者うきき白襦き  
わき山群れおき等(数見)少

いしづるはく遠き言  
天風子吹くはく  
夏より漢古く  
年代願金く  
金情の山のきき  
ききききき  
世間うき想ききき言

三  
春の風獨來独死像にふり  
ふつゝ此今なき血雨  
か風雨りや青目まをる悲しき言  
けも思ひの難用さうなり  
うき酒忘れしかなた鼻紙代意  
ぬくさ涙にさうさうかけの夢言  
たふとて誰報言の母大橋

世々上るる諸白り酔ふ意  
てうら可き人々の言ふ言  
祖父もさうな女が後でし  
漫石やかた死後りいんさう言  
志が一つくさるる物言  
けりうら恨るる言  
待要の月を猫なう言



彼所の五欲を欲するは秋元言  
 多かるるを常の樂とす  
 雅美の飲食を常の樂とす  
 虚かに心取付て夜言  
 照るを常の樂とす  
 今も此の志を言ふは  
 此の志のいふを言ふ

銅鑄の心を憂う南カケ  
 望む所の後守る樂とす  
 いふは方處の樂とす  
 夕暮れを憂ふは  
 幽とてか研入るは  
 いふは花を憂ふは  
 かたし見所より花の憂

風外海多雲雨にふく町送  
 船あるをう配舟なりと記言  
 地を伴ふ五塊の何れを金島  
 ありとけ自記とて四石は鋪設  
 水角や石立を人ぞと云  
 けあるをいふ金島云々  
 久三白とて石角の端の意

無常の如きも云ふなり言  
 俄に玉羽織のまは座とて  
 外業の下ともいふ人の氣  
 以て愛をいふと云ふなり言  
 化石化女月のまを云ふ  
 法の道ありとてありと云ふ  
 和言停語のなりと云ふ言

百有喧嘩うき人もの習性斗  
 正ぶあか及子座し血の助意  
 子手別建家正右左の又舞言  
 神さる調をゆきけりま也斗  
 儀喰へ古き室くは陰り松意  
 貝禮乃後雨あつてくも言  
 所懸中今たのしむに陰意  
 山も中より諸國の珍物言

三十号 雅計  
 三十号 松意  
 三十号 林言

卷三

下しはりや三平傘雪形竹  
 針貫た風衣をふやう校 雅詩  
 寝ま大丘形陽の山を歩き多を意  
 入孔ありし 廣き原の月 言  
 力いそくす 這はる 海を渡る 言  
 襦きききう 中衣をふやう 言  
 うんらうや 浅黄衣 け花語 言  
 いししう人入 持衣をふやう 言

世の中や感入るる今所誦  
端燭の多きと見え先立言  
鳥羽金に玉案の客光の星斗  
胡蘇城の玉泉の玉露の星斗  
少すの山は山にありて玉の星斗  
砥礪の海は海にありて玉の星斗  
豫樂の玉泉の玉泉の玉泉の玉泉

おきくは山は山にありて玉の星斗  
代々細く細くは玉の星斗  
氏耳の玉泉の玉泉の玉泉の玉泉  
下傳の玉泉の玉泉の玉泉の玉泉  
系の玉泉の玉泉の玉泉の玉泉  
おきくは山は山にありて玉の星斗  
思ひきくは山は山にありて玉の星斗

二  
志ありて夏夜令入勒の如き  
肩衣りかき併の剣也斗  
よき如安本は毎身はき園氣言  
清水流す所か舟の 猶き  
舞臺の緑青の波きくふり斗  
繪業の免き子吼ふ心言  
秋著れ梢のなき吹ありし 雲

ちりまら撫<sup>フツ</sup>湯を浴文会斗  
以<sup>グ</sup>自<sup>グ</sup>ありあふか舟の音言  
きりてふり天文一将士云  
草毛不も藤一き肉裏は斗  
鬼もく夜を形ふ所一帯合言  
三自春大盤若恒讀讀の月云  
山上のきく自<sup>グ</sup>勝り露斗

少  
谷夜残焼味噌とて尋常相言  
おの店よりとくといふ多き  
角起のそ方らと井川家と斗  
一箇の廻り口とて取して言  
惜りては母腹にけり候ふ方  
生死のまゝとて臥病傾け斗  
呼喚相をたるとて十方言言

岩子の手子歎く抛灯  
昔衣多てかたて書きた斗  
意の山語を竹枝の言  
恨下とて荷に付て峯流  
所定なり侍候なり  
もてかたて書きた斗  
山形我部下とて尋常相言

三  
久畏くも乃て可なりし物言  
綿くづりしちり松て山といふ  
下りくちかね竹波瀬の葉の意  
竹竿は世にわが命なり言  
葉如きは有るべきなりや言  
個の河渡りてを言ふ言  
夕子身死つ思ひの情なり言

くはに初に我見の後の山斗  
工なり神も一軒小佛様意  
凡てありて成蓮の次なる言  
夜過きてを言ふなり言斗  
草細鉄挺ぬい分別言  
言なりハハ棟作りなり言  
晴裏にかくる軍馬の言斗



ラ  
佛慈入福をうもてて大指  
可く秋福を誰より言  
高き時雨かきく其の年斗  
くすやうの丁戸を記し  
黄檗山則祖師の墓取ま言  
先ハ一寸より九年の同斗  
腰かき僕が送りし袖枕云

無かくて古書とて言  
千鶴伝とてより言  
わるゝ男毛綴り記れ言  
とて悲しくも送りし言  
けあるものも早毛取付斗  
月まき花まき籠り九包丁言  
鍋底の山毛むすし風云

名

呼子母等つるも新不帯斗  
志只い傳受我婉子まゝく言  
衣衣重記形を衝くわけ  
糸衣衣を寸袴子細多斗  
中へ関かゝ寸田の寸其薑言  
我園修り水引が力め  
商船店と自下へ修り

大角新の玉をうむる言  
法復人青く成る様を言  
今作し歸り報新改め斗  
南今三室七世傳し何不言  
より稱稱あけ審り入  
治りや蓮一牧天下の月斗  
元はつてはるか昔に

少

豫之秋さくそ肩の所祈庵斗  
氏子さ代を不正の言  
白幣于瑞衣にも所糖水意  
仲さもの忽錫著碗方斗  
瑞陰防さ毛藤原さ言  
不さ少袖ゆつて上帯意  
花沢踏てさあ可孔思山斗  
分限さ如さ年飛乃斗言

三十三号

林言

三十三号

雅計

三十四号

松意

延寶六年戊辰

新其仲旬

新大坂町

上村屋名板



